

〔第10回日本言語文化学会発表要旨〕
中日古代婚姻用語の比較―妻妾の呼称を中心に―

胡潔

(1995・7・1 発表)

I はじめ

日本古代の婚姻形態は、一夫多妻婚とも言われ、一夫一妻多妾婚とも言われている。従来これらの婚姻用語がかなりルーズに使われているため、言葉そのものの意味に混乱が起きている。この問題を考える前に、これらの言葉の定義を明確にすべきである。一夫多妻婚とは「一人の男性が二人以上の妻を持つ婚姻」で、一夫一妻婚とは「一人の男性が一人の妻を持つ婚姻」である。また、一夫一妻婚の一形態として、一夫一妻多妾制の婚姻制度がある。一夫一妻多妾制は古代中国に見られる婚姻制度で、一人の男性がある女性と結婚した以上、その女性と死別、離別しない限り、他の女性とは結婚できない。妻の外に妾の存在が認められるが、妾は正式の婚姻関係とされない。妻と妾とは厳格に区別されている。複数の女性を持つ点で従来一夫多妻婚と同一視されてきたが、ただ一人の妻しか有しない点から、これを一夫一妻婚の一形態と見るべきである。

日本は七世紀末から八世紀初頭にかけて中国から律令制を導入した。その際、中国の家父長制的な婚姻制度をも律令条文に書き入れたが、しかし、日本古代の物語や文献から知れる当時の日本の婚姻実態は、中国の家父長制的な一夫一妻多妾制度とは著しく異なるものである。私はこの相違を中日両国語にある幾つかの同型異語を通じて説明したいと思う。

II

①「嫡」

まず「嫡」という漢字がある。中国古代の字句の注釈書である『釈名』や『儀礼正義』などによると、「嫡」は正妻を指す言葉で、その対義語は「庶」であるという。一方、日本の古辞書である『新撰字鏡』にも「嫡」という漢字が見られ、その解釈は「主嫡也君也主也^{むかひめ}牟加比女又毛止豆女^{もととめ}」となっている。まず、「むかひめ」と「もととめ」とは、必ずしも同じ意味ではないことを指摘しておきたい。「むかひめ」は、記紀に見られる言葉で、「嫡妻」「正妃」といった漢字で記されている。主に皇室の系譜を中心に記録した記紀に「嫡妻」「正妃」といった言葉が見られるのは、律令国家の規範たる史書を完成しようという国家の強力な意志と、皇室婚においては、当時の一般

社会と異なった婚姻形態を持っていることによるものと思われる。皇室婚については、この発表の範囲外の問題で、詳しくはその方面の研究に譲るが、ここで、主に考えてみたいのは、「もとつめ」という言葉である。

「もとつめ」はまた「本の妻」とも呼ばれ、平安時代の文学作品に多く見られる言葉である。例えば、『大和物語』一四一段、一六七段や『伊勢物語』二三段に妻を持ちながらまた妻をもうける話の中にこの言葉が見られる。これらの用例の用法を見ると、「本の妻」は先に結婚した妻のことを言い、その後結婚した妻は「今の妻」と言う。両者とも妻であって、そこに妻と妾といった区別はあまりなく、共時的な結婚が見られる。また『竹取物語』や『大和物語』の一六五段に「もとの妻ども」というふうに複数で使われる場合もある。即ち男が新しい妻を設けた場合、それまでに結婚した女性は、単数でも、複数でも「本の妻」とされる可能性がある。これらの例から見ても分かるように、「もとつめ」は時間的に先に結婚した妻であるに過ぎず、かならずしも一夫一妻多妾婚で言う正妻ではないのである。

②「前妻」、「後妻」

『和名類聚抄』には「前妻」の項に「和名毛止豆女、一云古奈美」、^{うはなみ}「後妻」の項に「和名字波奈利」と注している。『日本書紀』に見られる神武天皇の歌や『大和物語』の百四十一段などの用例が示されているように、日本古代の婚姻において、「前妻」と^{うはなみ}「後妻」は同時的に存在している。しかし、古代中国の婚姻においては、前妻後妻が普通同時並立することはないのである。中国の『顔氏家訓』の「後娶篇」にある例を見ても分かるように、中国語においては、「前妻」は死別、離別した妻で、「後妻」はその後に結婚した妻であるので、両妻は同時存在しないのである。それに対して、日本語における「前妻」「後妻」は結婚する時間の前後によって呼ばれ、しかも、両妻共時的に存在しているのである。

③「次妻」

古代中国において、「次妻」という呼称の用例は宋代以降に少数ではあるが見られる。宋代趙鼎時の『賓退録』巻九に「蕭中一次妻耶律氏、制謂‘次妻’二字，別無經典，乞改称小妻」という用例がある。この文の中で、「次妻」は妾と理解され、また不正確な言葉だと批判されている。一方、日本において、「次妻」という言葉は律令条文の解釈書である『令集解』や漢文学者藤原明衡の『新猿楽記』などに見られる。「次妻」は「妾」と分けて使われ、

正妻と妾の間に位置する中間的な存在、正妻に比して、二次的な妻の意味に使われている。特に『新猿楽記』には、「次妻」は家の全般の管理をし、家庭内にかなり実力をもっていると描かれているところを見ても、家父長制婚姻における妾とは明らかに違うと言えよう。

両国語における「次妻」の使い方から、日本古代の多妻婚における妻たち相互の身分的な関係は、古代中国の家父長制婚姻に見られるような、一人の妻とその外の者との間に一線を画すのではなく、多妻の関係は漸層的になっていることが分かるのである。

④「妾」

中国の婚姻制度において、妻と妾が明確に区別され、『烈女傳』の「周主忠妾」などの例でも分かるように、妾は妻に隷属する存在である。それに対して、日本古代婚姻において、妾の実態ははっきりしない。妻妾の区別を導入した律令文献さえはっきりしないと言えよう。『養老律令』において、妻と妾を区別する条文がある一方、妻妾同一視する条文も存在している。もっとも顕著にこのような思想を表しているのは養老令の儀制令五等親条で、該条には妾は全面的に妻と同列に扱われているのである。このような律令条文の自己撞着について、当時の律令の解釈書である『令集解』は「本令（唐令）妾比賤隸、（中略）此間（日本）妾与妻同体」と、はっきりと両国の婚姻制度の相違を言っている。

Ⅲ 結論

以上、中日両国の幾つかの同形異語について見てきた。これらの言葉の違いから、古代中国と古代日本とは婚姻制度においては、明らかに相違が存在していることを再認識することができる。即ち、古代中国では、一夫一妻多妾婚が行われていたのに対して、古代日本では一夫多妻婚が行われていたのである。言葉の面からも、日本の婚姻関係を表す言葉と中国のそれと違うのである。このような違いは、制度つまり律令制の違いからくるものではなく、両国の婚姻風習の違いからくるものだと思われる。律令国家を目指す当時の日本は律令条文に中国式の家父長制的な一夫一妻多妾制の婚姻制度を書き入れたが、実際には当時の貴族以下の社会一般の婚姻習俗においては、まだ妻妾未分の段階にある。言い換えれば、まだ単婚の一夫一妻婚は確立されていない段階にあると思われる。

（人間文化研究科 比較文化学専攻 一年）